

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10595

研究課題名（和文）薬物依存症者の家族の「言いづらさ」にかんする研究

研究課題名（英文）Study on the Difficulty in Telling of Parents with Drug Addicts in their Families

研究代表者

谷口 俊恵 (Taniguchi, Toshie)

京都光華女子大学・健康科学部・講師

研究者番号：20757455

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：薬物依存症者を家族に持つ親たちを対象に、薬物の問題に関連する「言いづらさ」の体験についてインタビュー調査を行った。インタビュー調査に参加した人は10名で、薬物依存症者本人の主な依存薬物が覚せい剤であった人は6名、大麻が1名、処方薬が3名であった。インタビューの内容から導き出された結果として、親たちの体験した「言いづらさ」は薬物の問題のとらえ方とともに変化していく過程と並行し、自分自身の価値観や他者との関係性のあり方に向き合いつつ、新しい生き方を模索していく過程があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

薬物依存症者の家族は、依存症者本人の回復を支える重要な役割を持つ人と位置づけられてきた。しかしながら、薬物の問題について抱く、率直な「言いづらさ」がその役割を果たそうとすることを阻み、さらには家族自身の回復を遅らせていたことがインタビュー参加者の語りから色濃く浮かび上がった。その一方で、薬物の問題が「家族のあり方」を自らに問いかけるきっかけになっていたこと、また、そこから新しい生き方を見つけ出し、ていこうとしていることを描き出した本研究の結果は、今後の薬物依存症者の家族支援の一助となると考える。

研究成果の概要（英文）：Parents with drug addicts in their families were interviewed about their experiences of "difficulty in telling" related to drug problems. Ten people participated in the interview survey, six of whom indicated that the drug addict's own primary drug of dependence was methamphetamine, one indicated marijuana, and three indicated prescription drugs. The results drawn from the interviews revealed that the "difficulty in telling" experienced by the parents was paralleled by a process of change along with their perception of the drug problem, as well as a process of seeking a new way of life while confronting their own values and the way they relate to others.

研究分野：高齢看護学

キーワード：薬物依存症者の回復支援 家族支援 言いづらさ

1. 研究開始当初の背景

薬物依存症は、脳の慢性的異常により薬物の使用がコントロールできなくなる、精神疾患のひとつであり、薬物を乱用する者は薬物依存症という病気を持つ者(以下、薬物依存症者)として、「刑事司法制度ではなく、医療システムの中で扱われるべき」という認識が世界的な主流となっている。しかし、日本では、「ダメ。ゼッタイ。」に象徴されるように、覚せい剤取締法や大麻取締法といった法律で規制・罰則を強化し、薬物の危険性や違法性を全面に出すことにより、その使用および乱用の未然防止を最大の課題としてきた。だが、一次予防(薬物に手を出させない)が効果を発揮する一方で、薬物の乱用から依存が形成され、やめたくてもやめられない、薬物依存の状態(薬物依存症)になった人に対する二次予防(早期発見・介入)、三次予防(リハビリテーション)が遅れていることは否めない。

それでも近年になりようやく、日本でも薬物依存症の治療体制を充実させることの必要性が注目され、完治は難しい疾患ながらも、薬物療法のほか、認知行動療法や集団精神療法といった治療的アプローチが行われるようになりつつある。だが、薬物依存症者は「これは病気ではない、その気になればいつでも止められる」と言い、自らが治療につながろうとはせず、厚生労働省の調査によると、治療につながらない薬物依存症者の数は推計で約10万人にもものぼるとされる。そこで薬物依存症者の治療導入にあたっては、その家族が重要なキーパーソンとなるのだが、身内の薬物乱用に気付いてから医療をはじめとする関係機関に相談につながるまでに要する時間は、平均3-5年と非常に長い。その間、家族が自分たちだけで薬物依存症者の引き起こすトラブルに対処しようと一生懸命にそれを尻拭いする行動は、かえって薬物依存症を悪化させていることが問題になっている。

このような現状において、厚生労働省は、『ご家族の薬物の問題でお困りの方へ(家族読本)』を作成し、薬物依存症の早期発見・早期治療のために、薬物の問題に気付いた家族は速やかに関係機関に相談するよう、ホームページなどを通じて呼びかけている。また、家族読本の内容をもとにした、薬物依存症という病気についての知識と薬物依存症者に対する適切な対応方法を伝える家族教室が、病院や保健所などで行われるようになってきた。

しかしながら、その家族自身は、薬物依存症者の引き起こすトラブルの後始末に追われ、日常生活に支障が生じていたり、暴力・暴言の直接的な被害者になったり、心身ともに疲労困憊している。薬物依存症者の家族は高いストレス状態にあり、精神科的治療を必要とする人は多く、家族自身もケアを必要とする対象といえる。だが、薬物依存症者の家族支援といえば、前述の家族教室が主流となっており、どこかに相談に行こうにもそれを難しくしている、薬物の問題への他者への「言いづらさ」という苦しみについては未だに明らかにされていない。

2. 研究の目的

薬物依存症者の家族を対象にインタビューを行い、身内の薬物の問題の他者への「言いづらさ」を家族がどのように体験しているのか、ライフストーリーの中で描き出し、その特徴を明らかにすることにより、「言いづらさ」に苦しむ家族への具体的な支援を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

- 1) 研究デザイン：ライフストーリーインタビュー調査
- 2) 研究対象者：本研究の対象者は、薬物依存症者の家族で、薬物の問題に関連した「言いづらさ」を体験した人とする。
- 3) 分析方法：インタビューを録音したもものから逐語録を作成し、語られた内容を時間的流れに沿い、身内に起こった薬物の問題を知ってから現在までをライフストーリーとして再構成し、「言いづらさ」に焦点をあて、質的に分析を行う。

4. 研究成果

インタビュー調査に参加した人は10名で、全員が薬物依存症者にとっての母親であった。依存症者の主な乱用薬物が覚せい剤であった者が6名、大麻が1名、処方薬が3名であった。乱用する薬物の違法性の有無により、問題への気付きに違いについては別に記すが、薬物依存症の悪化に伴い、引き起こされるトラブルには大きな相違がなく、「言いづらさ」の根底にあるものは共通するものがあつた。

<家族が抱く「言いづらさ」の様相>

我が子の薬物乱用に気が付いた当初には、「息子/娘に薬物の問題がある」という現実を受け止める難しさがあり、「誰にも知られたくない、知られたらこの社会で生きていけない」という思いを強くさせ、「誰かに薬物の問題について言う、相談するなどの選択肢はない」状態であったが、薬物の問題がより悪い方向にいかないように、「どうにかする」方法を模索し、参加者たちは自助グループにたどり着く。そこで、身内の薬物の問題について言うことのできる他者を得ていくのだが、それは「話しても安全、安心できる場、仲間」だからであり、薬物の問題の「言

「いづらさ」は消えることはなく、それは「世間の目」を意識してのものであることが顕著に表れていた。その一方で、「捕まることを恐れて」もっとも隠し通したい相手であるはずの警察に「どうかしてほしくて」通報する家族もあった。それくらい切羽詰まった状況にあっても、「最後まで言えない」相手とは、自身にとっての「身内、とくに親」であったという参加者が少なくなく、そこには、「薬物の問題に対する世間の目を持つ他者」というとらえ方だけでなく、「娘としての申し訳なさ」があることが明らかになった。

< 薬物の問題が家族にもたらしたもの / 「いづらさ」からの気付き >

本研究のインタビュー参加者の語りより、薬物の問題に関連する「いづらさ」は、我が子の薬物の問題に気が付いた当初から今、現在までの数年、数十年の間、一貫してあるものの、自身の中の薬物の問題のとらえ方、あるいは、我が子が薬物依存症であるという現実の受け止め難さには大きな変化があった。参加者全員から、息子／娘の持つ「生きづらさ」への理解が語られ、「その生きづらさゆえに必要」とした薬物に対する拒否的な反応は薄らいでいた。そうした自身の内にかかる変化は、「こうあるのが当たり前」とされることへの疑問を抱ききっかけになっていったことが参加者たちの語りの特徴的な点として挙げられる。その最たるものが、「家族のあり方」であった。

薬物依存症者の回復のために、物理的・心理的距離をおくことが有効と言われており、参加者たちのほぼ全員、同居をしていなかったのだが、息子／娘のことを聞かれても「言うわけにはいかない、言えない」し、「言っても理解されない」と考えている。その「理解されなさ」を感じつつ、「私の家族のあり方」を模索し、人生を肯定的にとらえていく参加者たちの語りから、この点が新たな家族支援の鍵となるのではと考える。

< 処方薬依存の場合の「いづらさ」の特徴 >

息子／娘はうつや不眠の改善のために処方薬を服用していた。そのため、その副作用や離脱症状による問題行動がみられるようになっても、長年、何が起こっているのかわからなかった。その要因には、処方薬に対する期待、処方薬にかんする情報の与えられなさ、問題をわかりにくくさせるファクターとしての医療者があり、「処方薬に問題」があるという気付きは自助グループへの参加を通して得られていた。そして、薬物を乱用する背景には「つらさ、生きづらさ」があり、それは違法薬物と変わらず、「処方薬も覚せい剤も一緒」という理解に至った参加者たちは「いづらさ」という新たな苦しさを感じていた。薬物の乱用が「犯罪」ととらえられている限り、息子／娘が処方薬依存であるとわかったとしても、家族の心は楽になるわけではないということが明らかになったとともに、薬物依存症を司法の枠組みでとらえることの是非が問われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 谷口俊恵	4. 巻 Vol.17
2. 論文標題 処方薬依存を家族はどのように見ているのか 薬物依存症者の家族支援の視点と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CoreEthics	6. 最初と最後の頁 141-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竇田 穂 (Takarada Minor) (00321133)	武庫川女子大学・看護学部・教授 (34517)	
研究分担者	黒江 ゆり子 (Kuroe Yuriko) (40295712)	岐阜県立看護大学・看護学部・特任教授 (23702)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------